

## 平間寺蔵「高野大師行状図画」考

——十巻本系第六巻の検討をかねて——

はじめに

神奈川県川崎市にある平間寺は、川崎大師の通称で知られる真言宗智山派の名刹である。開創は大治三年（一一二八）と伝えられ、古くから厄除大師として人々の信仰を集めてきた。本稿で取り上げる「高野大師行状図画」一巻（以下、平間寺本と称する）は、近年、この平間寺の所有に帰したものである（注1）。第六巻のみの端本であるが、丁寧な描写と美しい彩色が施された優品であり、大師伝絵巻の新たな作例として注目される。ところが、昨年十二月に行った調査の結果、本絵巻は高知県土佐清水市足摺岬の金剛福寺に伝存する同名の絵巻と元来は一具のものであることが判明した。本稿では、まずその点を明らかにし、次いで同系統の作品と比較して、本絵巻の位置付けを考察することにした。

塩出 貴美子

一 平間寺本と金剛福寺本

### （一）平間寺本の概要

高野大師こと弘法大師空海の伝記絵巻には種々の作品が伝存する。それらは梅津次郎氏によって、①「高祖大師秘密縁起」十巻、②「高野大師行状図画」六巻、③「高野大師行状図画」十巻、④「弘法大師行状絵詞」十二巻、⑤版本「高野大師行状図画」十巻、以上五系統に分類整理されている（注2）。このうち最もよく流布したと思われるのは、⑤の版本は別として、肉筆本では③「高野大師行状図画」十巻の系統（以下、十巻本と称する）である。平間寺本もその一つであり、十巻のうちの第六巻にあたる。

平間寺本は、巻頭に「高野大師行状図画第六」の内題を有し、続いて「恵日草創」から「龍泉涌出」まで十二の事蹟名称を記した目次を掲げる（挿図1）。一事蹟を一段で表しており、全十



挿図2 久保家旧蔵本第十巻巻頭



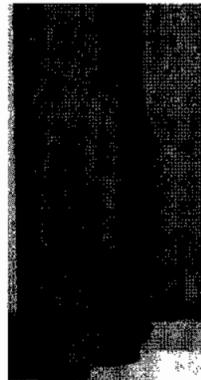
挿図1 平間寺本巻頭



挿図6 久保家旧蔵本第十巻奥書



挿図5 久保家旧蔵本第七巻署名



挿図4 久保家旧蔵本第五巻署名



挿図3 平間寺本署名

二段の構成である。各段の詞書にも標題が付されるが、十二段中十段は目次と若干表記を異にする。このような内題、目次、標題の形式は、いずれも十巻本に共通する特徴である。巻末には「道周」の署名と花押(挿図3)があり、これが本絵巻と金剛福寺本を繋ぐ鍵となる。

料紙は二十枚で首尾完備している。各料紙の右下裏面に通し番号が付されており、第一紙には確認できなかったが、第二紙の「六ノ二」から第二十紙の「六ノ廿」までは連続している。各料紙の法量は表1の通りである。保存状態は良好であるが、装丁は近年改められており、表紙、軸付紙および軸首は新しいものに取り替えられている。また、箱も新造である(注3)。

本絵巻は、一九九六年十月五日から十一月十日まで、横浜市市民ミュージアムで開催された「弘法大師信仰展」に出陳された。ちなみに筆者が本絵巻の存在を知ったのは、この時である。展示されていたのは一部のみであったが、図録には巻頭から第四段「讚州鍛山」の詞書途中まで、および第九段「小兒活生」の詞書途中から第十二段「龍泉涌出」の詞書途中までの二カットが掲載されている(注4)。合わせると詞は五段の全文と三段の各一部、絵は六段の全図となり、絵巻全体の約半分に相当する。しかし、解説は「当絵巻は、元応本(「高野大師行状図画」十巻)の系統を引くものである。これも、弘法大師信仰の広がりの中で制作された絵巻であろう。」と簡略に述べるだけで、

表1 平間寺本法量表  
(単位cm)

高さ	33.2
表紙	27.8
第1紙	44.6
第2紙	44.6
第3紙	44.6
第4紙	44.7
第5紙	44.6
第6紙	44.8
第7紙	44.6
第8紙	44.8
第9紙	44.8
第10紙	46.3
第11紙	43.4
第12紙	44.8
第13紙	45.0
第14紙	45.1
第15紙	44.4
第16紙	44.8
第17紙	45.6
第18紙	46.0
第19紙	45.4
第20紙	44.6
軸付紙	13.8

(測定：塩出)

「道周」の署名にも言及していない。なお「元応本」は十巻本の別称である。制作年代については「江戸時代」と表記しているが、実際には、後述するように応永二十二年（一四一五）秋から同二十三年（一四一六）三月にかけて制作されたものである。

その後、筆者も一度だけ本絵巻に言及したことがあるが（注5）、管見の限り、本絵巻についての所見は他に見あたらない。

## （二）金剛福寺本の概要

高知県土佐清水市の足摺岬の突端にある金剛福寺は、弘仁十三年（八二二）、嵯峨天皇の勅願を受けて空海が開創したと伝えられる。言宗の古刹であり、四国八十八箇所霊場の三十八番札所となっている。この金剛福寺が所蔵する「高野大師行状図画」（以下、金剛福寺本と称する）については、文化財保護委員会が昭和四十二年（一九六七）五月に行った文化財集中地区特別総合調査（高知県）の報告書に、眞保享氏による論考が掲載されている（注6）。これにしたがって金剛福寺本の要点をまとめると以下のようになる。

- ・ 巻一、巻二、巻三、巻四、巻九の五巻分がある。
- ・ 表紙は紺紙で「大師行状図画第一（二二）」の外題を朱書する。見返は白。
- ・ 本紙の寸法は縦三三・二センチ、横約四四センチ。

- ・ 「高野大師行状図画第一（二二）」の内題、目次、各段標題がある。

内容は元応本（十巻本）に一致するが、各巻に錯簡や欠脱が目立つ。

- ・ 第一巻末に「道周」、第四巻と第九巻末に「道周筆」の墨書がある。

第二巻と第三巻は巻末を失っていて不明。

- ・ 本絵巻は、昭和三十八年（一九六三）十一月に東京国立文化財研究所の開所記念に行われた「稀観絵巻物展観」に出陳された大阪久保惣太郎氏所有「高野大師行状図画」（応永二十三年本）四巻とすべてが符合する。

- ・ 久保家本は巻五、巻七、巻八、巻十の四巻。巻十に左記の奥書（挿図6）があり、制作年代、詞および絵の筆者、願主が明らかになる。絵の筆者名は金剛福寺本の墨書と一致する。清浄心院は高野山に現存するが、空心院や金剛手院は廃院となっている。

「于時應永廿二年自秋之比始同至廿三年

春三月之候書斯筆

執筆 空心院住侶善澄善澄

畫工清浄心院住僧道周道周

願主金剛手院権少僧都祐實祐實

以上のことから、金剛福寺本は十巻本の体裁と内容を備えたもので

あり、欠失する五巻のうち第六巻を除く四巻は当時既に久保氏の所有となっていたことがわかる。さらに金剛福寺本第一巻、第四巻、第九巻末の墨書および久保家本第十巻の奥書により、この絵巻を描いたのは「道周」であり、平間寺本に記された署名と同名の絵師であったことがわかる。

ところで、久保氏が入手した時期については、東京国立文化財研究所（以下、東文研と略称する。注7）に寄贈された「梅津次郎氏蒐集絵巻資料」に含まれる当該絵巻の一部を撮影した写真資料から、昭和三十四年（一九五九）四月三日以降、同三十七年（一九六二）六月三日までの間であったと推測される（注8）。けれども、現在、久保惣記念美術館には収蔵されていないので、昭和五十七年（一九八二）の同館設立以前に手放されていたものと思われる。その後の消息は残念ながら不明である。

しかし、幸いなことに東文研には先述の「稀観絵巻物展観」の開催時に撮影された四巻全体の写真が保管されている（挿図2）。また、その際に測定された四巻全体の法量も記録されている。これを見ると、四巻とも巻尾欠けるところなく、十巻本の体裁と内容を完備している。第五巻と第七巻の巻末には「道周」の署名と花押がある（挿図4・5）。その筆跡は平間寺本のそれと一致しており、これによって金剛福寺本・久保家旧蔵本の「僧道周」と平間寺本の「道周」が同一人物であることが確認できる。ただし、第五巻では半分以上を軸に巻き込まれている。第八巻にはないが、絵の末尾と軸の間がわずかしかなないので、

軸に巻き込まれている可能性がある。第十巻にもないが、ここには真保氏が紹介された奥書がある。この奥書は詞書と同筆である。

### （三）平間寺本の出自

さて、金剛福寺本と久保家旧蔵本に平間寺本を加えると、ちょうど十巻が相揃うことになる。ここで、この三者を比較してみよう。ただし、金剛福寺本については許可が下りなかったため未調査であるので、



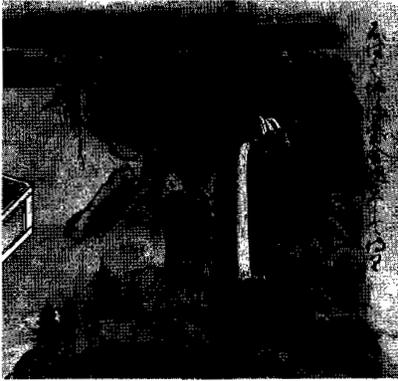
挿図7 平間寺本の人物表現  
（第三段「劔御山」）



挿図8 久保家旧蔵本の人物表現  
（第五巻第五段「水神求福」）

真保氏の報告をたよりとするが、同報告書には図が掲載されていない。そこで、東文研の「梅津次郎氏蒐集絵巻資料」のなかの写真を参考にし

た（注9）。  
まず、内題、目次、標題の形式は十巻とも全く同じである。詞書は金剛福寺本・久保家旧蔵本は奥書通り



挿図10 久保家旧蔵本の風景表現  
(第五卷第三段「加持霊水」)



挿図9 平間寺本の風景表現(第八段「大峰修行事」)

すべて同筆であり、平間寺本もこれと同筆とみてよい。絵は、人物は細やかな筆致で表情豊かに表されるのに対し、風景は太い墨線による荒々しい岩の表現が目立つが、それらは十巻ともに共通する特徴である(挿図7〜10)。「道周」の署名あるいは奥書がある七巻が同筆であることは言うまでもないが、署名のない三巻(金剛福寺本第二巻・第三巻、久保家旧蔵本第八巻)についても道周の筆になることは明らかである。なお、真保氏は金剛福寺本の第四巻と第九巻の墨書を「道周筆」としているが、三文字目は「筆」ではなく花押であると思われる。法量は、金剛福寺本は縦三三・二センチ、

横約四四センチとあるが、久保家旧蔵本は縦三三・〇〜三三・四センチ、横は四五センチ前後が大半である。したがって、平間寺本(表1参照)も含め、一具の絵巻としての許容範囲内に収まっていると言えるだろう。

以上のことから、平間寺本が金剛福寺本および久保家旧蔵本から欠落していた第六巻であることは明らかである。真保氏によれば、明治三十三年(一九〇〇)の富山房発行「大日本地名辞書」には「足摺山寺の大師絵伝は十巻、応永廿三年の奥書あり云々」とあるというから、その当時は金剛福寺にまだ十巻が揃っていたのであろう。第六巻は、それ以後のある時期から、久保家に入る四巻とは別経路で流転し、近年ようやく然るべき所蔵者を得たと言えよう。なお、金剛福寺に現存する五巻は、昭和四十八年(一九七三)八月八日付で高知県の指定文化財に登録されている。

## 二 同書の比較

次に、平間寺本を同系統の諸作品と比較してみよう。本来なら金剛福寺本および久保家旧蔵本も含め十巻全体の比較を行うべきであるが、紙数の制約もあり、本稿では平間寺本、すなわち第六巻のみにとどめる。平間寺本が属する十巻本系統のなかで第六巻が現存する作品は十件ばかりある(注10)。ここでは、そのなかから平間寺本に先行する白鶴美術館本(元応元年、一三一九)と延暦寺本(応永十四年、一四

表2 「高野大師行状図面」第六巻  
詞書対校結果一覽

	件数	割合
1 延・平・大に共通の異同	139	63.7%
①平仮名→漢字	77	35.3%
②漢字→平仮名	8	3.7%
③仮名遣い	28	12.8%
④字句の出入	14	6.4%
⑤字句の異同	12	5.5%
2 延のみの異同	43	19.7%
①平仮名→漢字	21	9.6%
②漢字→平仮名	7	3.2%
③仮名遣い	8	3.7%
④字句の出入	5	2.3%
⑤字句の異同	2	0.9%
3 延・平に共通の異同	1	0.5%
4 平・大に共通の異同	23	10.6%
①平仮名→漢字	18	8.3%
②漢字→平仮名	4	1.8%
③仮名遣い	1	0.5%
5 大のみの異同	2	0.9%
6 その他	10	4.6%
合計	218	100.0%

・延は延暦寺本、平は平間寺本、大は大蔵寺本の略。  
 ・①～⑤は異同内容の内訳であり、数字は内数である。  
 ・「6その他」は白鶴美術館本に対し二通りの異同が生じているもの。

○七)、および諸作品のなかで図様が最もよく平間寺本に相似する大蔵寺本(延徳二年、一四九〇)、以上三点を比較対象として取り上げる。まず、詞書については、制作年代がもともと古い白鶴美術館本を基準とし、他三本と校合した結果、合計二二八件の異同が検出された(表2参照、対校結果は本稿末に掲載)。これを白鶴美術館本の側から文字数に換算してみると、総字数約二千百字のうち二割弱にあたる約四百字に対し、他三本のいずれかが異なっているということになる。四本の相互関係では、白鶴美術館本に対し他三本が共通の異同を見せるもの、すなわち四本のなかで白鶴美術館本のみが異なるものが三九件でもっとも多い。異同内容は、平仮名を漢字に改めたものが十七件と半数以上を占めるが、逆に漢字を平仮名に改めたものは八件

しかない。仮名遣いでは、白鶴美術館本は格助詞の「を」「お」と表記する場合があり、これを「を」に修正したものが二十五件ある。また、第三段12(算用数字は本稿末掲載詞書対校の異同番号に対応する、以下同)は「をかせ」の「を」を「お」に修正したものである。他二件は「いきほひ」を「いきおひ」(第二段8)に、「もとる」を「もとひ」(第四段13)に他三本が書き誤ったものである。字句の出入では、会津郡の「郡」(第一段10)、四天王の「王」(第五段19)、「柱おあらひて」の「柱お」(第七段35)、尺摩訶術論の「尺」(第八段2)、日想観の「観」(第十一、二段11)、「号すといへり」の「といへり」(第十二、二段31)が抜けるが、逆に一字加えて「祖師」を「高祖師」(第一段21)とした場合もある。そのほかは送りがなや助詞、動詞・助動詞の活用語尾などの出入である。字句の異同では、第三段の標題「釈尊出現」が「釈迦如来出現」(1)になるのが注目される。また「よる道おゆく」が「より道を行く」(第五段8)になるのは意味が通じないが、「かならひをふくあり」は「悲を含めり」(第十二段7)となつてようやく意味が通じる。そのほかは「京洛」が「京都」(第一段28)に、「尺迦」が「釈迦」(第三段6)に、「尺尊」が「釈尊」(第七段7・20)に、「大臣」が「太臣」(第十二段8・17)になるなどの漢字の異同、また動詞の活用語尾や助詞の異同である。

次に、延暦寺本のみが異なるものは四十三件ある。その半数はやはり平仮名を漢字に改めたものであり、その逆は七件である。仮名遣いでは「いへり」を「いえり」にするなどの「へ」と「え」の誤りが六

件（第一段32ほか）あり、また「もとほる」を「もとをる」に誤ったもの（第六段5）、「た、しう」を「た、しく」（第十二段11）に書き換えたものがある。字句の出入は、「神仙の術」の「術」が抜ける（第六段14）ほかは、送りがなを表記したもの（第一段29、第七段3）、格助詞の「の」の出入（第五段1、第七段38）である。字句の異同は「餘」を「余」（第一段20）に、「大臣」を「太臣」（第十二段1）に書き換えている。いずれも詞文の内容には大差なく、表記に関する異同である。

平間寺本のみが異なる例はないが、延暦寺本と平間寺本に共通する異同が一件ある。これは役行者の「役」を「促」に書き誤ったものである（第八段8）。また、大蔵寺本のみが異なるものは二件で、「蒼海」の「蒼」を書き落としたもの（第十一段2）と、「龍主人の形を現して」の「形」を「貌形」としたものの（第十二段15）である。ところが、白鶴美術館本に対し平間寺本と大蔵寺本が共通の異同を見せるものは二十三件ある。平仮名を漢字に改めたものが十八件、逆に漢字を平仮名に改めたものが四件、残る一件は「かまゑ」を「かまへ」に修正したものの（第六段2）である。いずれも表記に関する異同ではあるが、四本のなかで平間寺本と大蔵寺本が特に密接な関係にあることを窺わせる。

このほか白鶴美術館本に対し二通り以上の異同が生じているものが九件ある（表2の「6その他」）。異同内容は送りがなや格助詞の出入のほか、漢字と平仮名の変換、動詞の活用語尾の異同などである。そ

のうち八件は、延暦寺本の異同に対し、さらに平間寺本と大蔵寺本が共通して別の異同を見せる。残る一件は「其」に対し、延暦寺本と平間寺本は「それ」、大蔵寺本は「その」とするもの（第十二段23）であるが、これは明らかに大蔵寺本の誤写である。

以上のことから、異同の大半は漢字と平仮名、仮名遣いに関するものであることがわかる。表2の中の①②③を合計すると一七二件、全体の八割近くに達する。また、字句の出入・異同においても一文字程度のもが多く、詞文が大きく変わる例はほとんどない。そのなかでは、第三段の標題や第十二段7の「かならひをふくあり」などが注目される。

さて、右の二例もそうであるが、白鶴美術館本のみが異なるものが異同全体の六三・七%を占めることを考慮すると、平間寺本は白鶴美術館本よりも延暦寺本に近い位置にあるように思われる。とはいっても、延暦寺本と平間寺本の間にも七十四件（表2の2・4および6のうち八件、三三・九%）の異同があり、そのうち四十三件（表2の2）は延暦寺本ではなく白鶴美術館本と一致するものであるから、直接の転写関係は考え難いであろう。

また、先にも述べたが、四本のなかでは平間寺本と大蔵寺本に特に密接な関係が認められる。そこで改めて平間寺本と大蔵寺本を見ると、驚くべきことに第一段の詞書全十三行については、一行の文字数から変体仮名の使い方まで完全に一致している。第三段全六行についても同様である。その他の段では、平間寺本の料紙の縦三三・二センチに

対し、大蔵寺本は三〇・八センチ（第四巻のみ三〇・七センチ）とやや狭くなるためか、文字が少しずつ次行に送られていく傾向がある。しかし、変体仮名については、「能」と「乃」（第二段四行目）、「類」と「留」（第四段七行目）のように相違するのはわずか八文字だけである。さらに筆跡もよく似ており、まるで臨書したかのようである。字句の異同は、延暦寺本と平間寺本に共通する異同である「促」（第八段8）、大蔵寺本のみが異なる「蒼」（第十一、二段2）と「貌」（第十二段15）、および大蔵寺本の誤写である「の」（第十二段23）、以上四件のみである。このように平間寺本と大蔵寺本は極めて近い関係にあり、直接転写の可能性も十分に考えられる（注11）。そうであるならば、先の「促」については、平間寺本の誤りを大蔵寺本が修正した可能性も考えられる。また「の」については、平間寺本は「礼」の崩し字を用いており、これを「能」の崩し字と見誤ったのかもしれない。

### 三 図様の比較

次に、平間寺本の図様を他三本と比較してみよう（図1-11、図12-4参照）。なお、以下では事蹟名称は白鶴美術館本の目次を用いることとする。

#### 第一段「恵日草創」

第一段は、大師が陸奥国会津郡の霊地に恵日寺を建立し、徳壹菩薩に附属するという事蹟である。画面には、住房内で対座する大師と徳壹が

描かれる。白鶴美術館本は住房を画面左端に寄せ、中央から右にかけては流水、それを挟む土坡、そこに生える樹木などの風景を広やかに描く。延暦寺本はこれと相似た図様であるが、住房が画面に占める比率が大きくなり、人物もやや大き目になる。反対に風景は画面右半に縮小され、住房近くの岩や草木が消える。また、白鶴美術館本には二本の松が描かれているが、延暦寺本では松、桜、緑樹各一本にかわる。

一方、平間寺本では、住房が斜投影法（注12）によるものとなり、画面のほぼ一杯に広がる。先の二本とは構成が大きく変わっているように見えるが、大師と徳壹の位置関係は同じであり、画面右下に寄せられた土坡と樹木にも白鶴美術館本や延暦寺本の風景の名残が感じられる。特に華やかに咲き誇る桜は、表現は異なるものの延暦寺本の桜との繋がりを窺わせる。大蔵寺本は平間寺本とよく似た図様であるが、全体的に簡略化の傾向が目立つ。たとえば、廊下に張り出した格子状の囲いは白壁になり、画面左端の柱の左では畳が省略されている。風景においても松が一本少なくなり、土坡や庭に生えている草類、庭に散り敷く桜の花びらが描かれていない。しかし、両本の相似性は極めて強く、大蔵寺本が平間寺本の影響下にあることは疑いない。

#### 第二段「靈山結界」

第二段は、大師が奥州信夫郡の靈山寺で結界し、悪魔を封じるという事蹟である。画面には、本堂に座す大師と上空にいる悪魔たちが描かれる。白鶴美術館本は画面左に本堂を描き、その下方に遠山と樹木、右に近景の土坡、樹木と水流を描く。悪魔は霞で隔てられた画面

上部に七体描かれる。一体を除き有翼で、鼻が高く、人面と鳥頭が混交している。延暦寺本はこれと似た図様であるが、水流は描かれていない。悪魔のうち左右の二体ずつは白鶴美術館本と対応するが、中央部は白鶴美術館の三体から五体に増える。

平間寺本も似た図様であるが、画面下方から樹木がなくなり、そのため遠山ではなく近景の土坡のように見える。悪魔は白鶴美術館本と同じ七体であるが、有翼、鼻が高い、鳥頭などの類似点はあるものの、表現はかなり異なる。白鶴美術館本では「うしろの山にかりこめ」られて意気消沈しているように見えるが、延暦寺本はもう少し元気があり、平間寺本になると元氣すぎるような表情である。また、堂の側面の開け放たれた扉の中に注目すると、白鶴美術館本は空白のままであるが、延暦寺本は堂内の床や壁を描いており、平間寺本はさらに須弥壇と千手観音像の手まで描いている。大蔵寺本は平間寺本と同様であるが、庭の草が描かれていない。

### 第三段「釈尊出現」

第三段は、大師が生誕の地である讃岐国屏風浦の山で修行した時、釈迦如来が顕現したという事蹟である。画面右に大師、左に僧形二体を伴う釈迦如来が描かれる。白鶴美術館本は大師の後方にも屹立した山を描き、上方を霞で隔てて高さを強調する。「山の形屏風をなせる」を意識した表現であろう。釈迦如来が顕現する山も「孤峯の上、片雲の中」にふさわしく、垂直に聳え立ち、下方は霞で覆われている。そのため、大師と釈迦如来の間には遙かな距離感が生じている。延暦寺

本はこれと似た図様であるが、山の表現が異なり、霞も消えたために山の高さがあまり感じられず、大師と釈迦如来の間の距離感を喪失している。

平間寺本は延暦寺本と似た図様であるが、釈迦如来が顕現する山は消えてなくなり、画面上下の土坡にわずかにその痕跡を残すのみである。大師と釈迦如来の間には何もなく、釈迦如来が大師の眼前に迫っているように見える。大蔵寺本も同様である。また、大師に注目すると、白鶴美術館本と延暦寺本では三鉈杵を持つが、平間寺本と大蔵寺本では合掌する。

### 第四段「讚州劔山」

第四段は、大師が讃岐国劔御山で修行した時、五柄の利劔が空から下り、また金剛蔵王が顕現して大師と談話したという事蹟である。画面右に蔵王権現、左に大師、その上空に五本の劔が描かれる。白鶴美術館本は画面中央に右上がり突き出した岩山を描き、その斜面に蔵王権現を、その左のやや平らなところに大師を描く。さらに右後方に霞を隔てた遠山を添えて、奥行きを描出する。延暦寺本は基本的には白鶴美術館本と似た図様であるが、中央に広い卓状の岩を描き、その上に蔵王権現と大師を描く。その右上や手前あたりに遠山や樹木を描くのは、白鶴美術館本の風景を踏襲したものであろう。空中に浮かぶ五本の劔は、白鶴美術館本とは配置を異にする。

平間寺本は延暦寺本と似た図様であるが、大部分の樹木が省略され、岩山のようになる。空中の劔の配置も白鶴美術館よりは延暦寺本

に近いが、間隙が少しだけずれている。大蔵寺本は平間寺本とほぼ同じである。

#### 第五段「普通寺額」

第五段は、陰陽師阿部清明が讃岐国屏風浦の普通寺の前を通りかかった時、神火を灯していた使鬼が、大師の書いた門額を恐れて姿を消したという事蹟である。画面には普通寺の門と清明の一行が描かれる。白鶴美術館本は画面右端に普通寺の門を描き、その内側に堂舎の屋根を覗かせる。門の前には額を守護する四天王がおり、二体は基壇の上に立ち、二体は空中に浮かぶ。清明の一行は画面中央を左向きに進み、その行く手には人家や土坡、樹木、流水などの風景が広がる。延暦寺本はこれと似た図様であるが、門が大きく描かれ、空中に浮かんでいた四天王のうちの二体は二階の高欄の内側に立っている。門の内側の堂舎の屋根は見えない。清明一行は馬の後方にいた人物が前方に移動しているが、人数に変わりはない。画面が短くなり、風景は画面上方の人家三軒、下方の流水だけに簡略化されている。

平間寺本は延暦寺本と似た図様であるが、二階の四天王は屋根の上に立つ。画面は更に短くなり、人家も消えて画面左下に水流の痕跡だけが残る。大蔵寺本は平間寺本と同様であるが、水流が完全に消えるほか、門や塀の屋根瓦の表現が簡略化されている。

#### 第六段「土州朽橋」

第六段は、大師が土佐国にある朽ちかけた橋に三帰を授け、朽損しないようにしたという事蹟である。画面には、橋の前に立つ大師が描

かれる。白鶴美術館本は画面左上から右下に向けて川を流し、二枚の板を繋いだ橋を架ける。橋の途中には朽ちて欠けたところがある。延暦寺本はこれと似た図様であるが、橋は一本の木となり、欠けたところはなく先の方に枝葉が付いている。これは、詞書のいう「趙炳か枯木を咒してふた、ひ枝葉の榮をひらきし」という故事から影響されたものと思われる。

平間寺本は橋と大師の位置関係は同様であるが、川の左右は崖となり、峡谷を思わせるような風景に一変する。しかし、大師の向こうに描かれた大きな岩山は、延暦寺本の画面左下の山に通じるもののように思われる。また、橋はやや屈曲するが、やはり枝葉を付けている。大蔵寺本は平間寺本とほぼ同じである。

#### 第七段「天地合字」

第七段は、大師が播磨国で老嫗から供養を受け、柱に「天地合」の三字を書き付けるという事蹟である。画面右に大師が老嫗の家に招き入れられる場面が、左に供養を受ける場面が描かれる。白鶴美術館本は枝先を残した木で組んだ垣根を左下がりに描き、門のところに大師と応対する下女を描く。垣の内側には柳と紅葉があり、画面上方には別の垣根と網代垣が見える。屋内には鉄鉢を捧げ持つ女と大師が描かれるが、女に対して大師は横向きになっている。延暦寺本はこれと似た図様であるが、大師は向きを変えて女と対座する。垣根は疎らなものになり、樹木は柳のみになる。網代垣は描かれていない。

平間寺本はこれらと似た図様であるが、屋内の大師と女の位置が

逆転し、建物の構造も少し変わる。また、縁先に描かれた大師の杵は、白鶴美術館本、延暦寺本にはない表現である。垣根は白鶴美術館本と同程度の四つ目垣になるが、枝先は切り揃えられている。柳は描かれていない。大蔵寺本は平間寺本とほぼ同じである。

#### 第八段「大峯修行」

第八段は、大師が大峰で修行し、役行者と契りを深くしたという事蹟である。詞書には役行者が高野に通うという文言もあるが、画面には役行者が大師を先導するところが描かれており、大峰修行の場面と見るべきであろう。白鶴美術館本は画面左寄りに山を描き、その下方は雲霞で覆い、上方と右方には霞雲を隔てて遠山を描く。霊雲も描き添えられており、深山幽谷の趣が醸し出されている。山の中腹からは滝が流れ出している。延暦寺本はこれと相似た図様であるが、雲霞をあまり描かないため趣はかなり異なる。滝はより大きく描かれている。平間寺本は延暦寺本と相似た図様であるが、樹木が少なく岩山の中のようなのである。滝は左右反転するが、延暦寺本と同じ位置に描かれている。大蔵寺本は平間寺本とほぼ同じである。

#### 第九段「小兒活生」

第九段は、和泉国大鳥郡の寡婦の男子が狼に食われて死ぬが、大師が蘇生させるという事蹟である。白鶴美術館本は絵を欠いているので、延暦寺本から見てみよう。右から大師、小兒、母親を描き、左に崖と土坡、土坡の上に立つ狼を描く。右上にも土坡を描く。

平間寺本は大師、小兒、母親は同様に描くが、小兒と母親はより近

接する。画面右上に土坡を描き、その上に狼を立たせるが、その狼は延暦寺本を左右反転したような図様である。延暦寺本と大蔵寺本は一見異なる図様のようにも見えるが、それぞれのモチーフにはやはり連関が認められる。大蔵寺本は平間寺本とほぼ同じである。

#### 第十段「了知牛語」

第十段は、大師が摂津国住吉浦で子牛の間に答えるという事蹟である。画面には、大師と弟子二人、子牛が一頭描かれる。白鶴美術館本は画面右下に海辺を描き小舟を三艘添える。画面左上には遠山を描き、霞をかける。大師は子牛を指さしながら振り返り、弟子に語りかけているところである。子牛の背後には住吉の赤い鳥居と柵、その内側に松の木が数本描かれている。延暦寺本はこれと相似た図様であるが、海辺は画面の下方全体に広がり、小舟は中程の一艘だけになる。遠山は省略され、「犢(ごうし)」と言うにはやや大きい牛が鳥居の前に立つ。鳥居からのびる柵は、白鶴美術館本では向かって左側が屈曲していたが、延暦寺本では真つ直ぐになっている。

平間寺本は延暦寺本に相似た図様であるが、小舟は二艘で画面左に寄せられる。松の木は鳥居の外側に描かれるようになり、向かって右側の柵はこれを囲むように屈曲する。大蔵寺本は平間寺本とほぼ同じであるが、小舟が消え、松の数も二本減っている。

#### 第十一段「西門日想」

第十一段は、大師が四天王寺の西門で日想観を修した時、頭上に五智の宝冠が顕現したという事蹟である。画面には、四天王寺の門とそ

の基壇上に座す大師、日輪が描かれる。白鶴美術館本は画面右下に門を配し、その外になる画面左方には広やかな海を描く。日輪は青い波の上にあり、「蒼海雲につらなり、赤日波に映じて」にふさわしい表現となっている。扉の外には樹木が二本添えられる。延暦寺本はこれと似た図様であるが、門は斜投影法で描かれ、構造に不可解なところがある。門の外では海がなくなり、日輪は山の端にかかっている。

平間寺本は延暦寺本と似た図様であるが、門の形は整えられる。しかし、風景については山も扉の外の樹木もなくなり、雲間に浮かぶ日輪だけが描かれている。大蔵寺本は平間寺本にはほぼ同じだが、第五段「善通寺額」と同様に、門や扉の屋根瓦の表現が簡略化されている。

#### 第十二段「龍泉涌水」

第十二段は、大師が河内国の竜泉寺で加持をして酒池に龍を呼び戻し、清泉を涌き出させたという事蹟である。画面には、大師と龍が対面するように描かれる。白鶴美術館本は、三鉈杵を持った大師を池の畔に立たせ、その左に黒雲に乗った龍の上半身を描く。池には既に水が湛えられている。画面右端の無人の住房は「僧徒住持にたへず」に対応するものと思われる。住房の近くには土坡が描かれる。延暦寺本はこれと似た図様であるが、大師は三鉈杵を持っておらず、龍は大きくなって全身を現す。

平間寺本は龍の形は延暦寺本に相似するが、大師が三鉈杵を持っている点は白鶴美術館本と共通する。大蔵寺本は平間寺本とほぼ同じである。

さて、全体的に見ると、白鶴美術館本は自然の風景の中で事蹟を展開させようとする傾向が強く、例えば第一段「惠日草創」、第五段「善通寺額」、第十一段「西門日想」などでは、風景も画面の重要な構成要素になっている。また第三段「釋尊出現」や第八段「大峯修行」などに見られる雲霞の多用は、画面に空間的な広がりをもたらす効果がある。それに比べると他三本は事蹟中心の構成になっており、風景は簡略化され、人物が大きめに描かれる傾向がある。特に、この傾向は平間寺本と大蔵寺本に強く表れる。その結果、白鶴美術館本に描かれていたモチーフが他三本では省略されることが多いが、特に第五段「善通寺額」では、延暦寺本、平間寺本、大蔵寺本の順にその過程を辿っていくことが可能である。

このように四本の図様は密接な関係にあるが、その相互関係は以下のように考えられる。まず、延暦寺本が白鶴美術館本の図様の影響下にあることは明らかである（注13）。しかし、両本の間には種々の相違が生じており、その点に注目すると、平間寺本は白鶴美術館本よりも延暦寺本に近い図様であると言える。延暦寺本と平間寺本に共通する表現としては、第一段「惠日草創」の桜花、第四段「讚州釵山」の卓上の岩山、第五段「善通寺額」の門と四天王、第六段「土州朽橋」の橋などが顕著な例として挙げられる。しかし、平間寺本の図様の中にも、延暦寺本ではなく白鶴美術館本と共通する要素が含まれている。例えば、第二段「靈山結界」の悪魔が七体であることや、第七段「天地合字」の垣根の表現、第十二段「龍泉涌出」の大師が手にする三鉈

杵などは、白鶴美術館本に由来する表現であると思われる。したがって、詞書の場合と同様に図様においても、白鶴美術館本あるいは延暦寺本と平間寺本の間に直接の転写関係を想定するのは難しいであろう。また、平間寺本と大蔵寺本については、十二段すべての図様において強い相似関係が認められる。さらに描写様式も類似しており、平間寺本の特徴としてはじめに指摘した細やかな筆致による人物表現や太い墨線による荒々しい岩の表現は、大蔵寺本にも同じように見出される。ただし、大蔵寺本はモチーフを一部省略したり、描写を簡略化する傾向があり、平間寺本の図様に先行性があるのは明らかである。

### 結語

本稿では、川崎大師のこと平間寺が所蔵する「高野大師行状図画」第六巻が、高知県足摺岬の金剛福寺から流出したものであることを、本巻末尾に残された「道周」の署名を手がかりとして明らかにした。ついで、平間寺本の詞書と図様を白鶴美術館本、延暦寺本、大蔵寺本と比較検討し、平間寺本は白鶴美術館本よりも延暦寺本によりよく一致すること、しかし、延暦寺本ではなく白鶴美術館本の側と一致する部分もあることから、この三者間に直接の転写関係を想定するのは難しいことを指摘した。また、平間寺本と大蔵寺本については、詞書、図様双方に強い相似性が認められること、大蔵寺本の図様に省略や簡略化の傾向があることから、制作年代通り、平間寺本に先行性を認め

るべきであること、さらに、この両者間には直接転写の可能性も考えられることなどを指摘した。

ところで、「高野大師行状図画」十巻本については、かつて図様の比較から転写系統を推定したことがある（注14）。平間寺本については、大蔵寺本と最もよく相似することから、その下に仮置きしておいたが、右で見てきたように平間寺本の方に先行性があることは明らかであり、ここで訂正しておきたい。

平間寺本、久保家旧蔵本を含む元来の金剛福寺本は、昭和九年（一九三四）に長谷宝秀氏によって編纂された「弘法大師絵伝目録」（注15）には掲載されていない作品である。所在不明の巻があり、一部に欠失もあるが、それでも十巻の全容がわかる作品が一点増えたことは喜ばしいことである。延暦寺本に次いで古く、しかも出来映えもよいことから、十巻本のなかでも重要な位置を占める作品である。また、高野山内で制作されたことが明らかな点でも、惣持院本（白鶴美術館本）、親王院本、本證寺本、宝集寺本等に次ぐものとして興味深く思われる。本稿では平間寺所蔵の第六巻のみを対象としたが、他の巻についても今後検討を進めていきたい。

### （注）

- 1 本絵巻は昭和五十六年三月に購入されたものである。
- 2 梅津次郎「池田家蔵弘法大師伝絵と高祖大師秘密縁起」「地藏院本高野大師行状図画―六巻本と元応本との関係―」「東寺本弘法大師伝絵の成立」

- 【美術研究】七八・八三・八四号、一九三八年（『繪巻物叢考』所収、中央公論美術出版、一九六八年）。
- 3 表紙に題箋はあるが、外題は記されていない。箱表には「高野大師行状繪巻六」と墨書され、蓋裏には「深男鑑」の墨書と朱文方形「深」印がある。川崎市市民ミュージアム編集・発行「弘法大師信仰展」一九九六年、作品番号8。
- 5 拙稿「弘法大師伝繪巻考―諸本の分類と概要―」『文化財学報』第十五集、一九九七年、三九頁。
- 6 真保享「金剛福寺の高野大師行状図画」『文化財集中地区特別総合調査報告第六集 四国八十八箇所を中心とする文化財（高知）』文化財保護委員会、一九六七年。
- 7 現在名は独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所。  
昨秋、「梅津次郎氏蒐集繪巻資料」の中に「高野大師行状図畫 応永二二年」と題する写真資料があるのを確認した（資料番号070）。梅津氏は撮影した写真のベタ焼きを台紙に貼付して整理するのを常としておられたが、これはそのうちの一件で三枚からなる。一枚目と二枚目は昭和三十四年（一九五九）四月三日に撮影したものと思われる。一枚目には第七巻、第八巻、第十巻の巻頭一紙分のベタ焼き写真を貼付し、記入用に設けた枠内に「高野大師行状図画」「零本四巻のうちの巻頭」「34、4、3」とペンで、さらに「久保惣二入ルカ」「応永22年僧道周画」と鉛筆で記入している（数字は年月日を表す）。二枚目には同様に第十巻の第六段詞書末尾から巻末の奥書までを貼付し、枠内に「高野大師行状図画」「応永22年僧道周画」「卷十 卷末」「34、4、3」とペンで記入し、さらに枠外二箇所鉛筆で「久保惣二入ルカ」と記入している。撮影した時点では、まだ久保氏所有でなかったが、後日、久保氏が購入したことを知り、「久保惣二入ルカ」と書き加えたものであろう。三枚目は昭和三十七年（一九六二）六月三日に撮影したもので、第十巻巻末部分のベタ焼きと小さめの焼付写真を貼付し、枠内に「高野大師繪」「4巻あり」「久保惣太郎氏」「37、6、3、②」（②は2本目のフィルムの意）とペンで記入している。この時点では、既に久保氏の所有となっていたことがわかる。
- 9 「梅津次郎氏蒐集繪巻資料」資料番号071。注8で言及した資料番号0

- 70と同様にベタ焼き写真を貼付したもので、昭和四十八年（一九七三）三月十二日の日付がある。
- 10 注5掲載拙稿、三六頁参照。
- 11 金剛福寺本と大蔵寺本については、既に鹿島藩氏が「構圖の酷似」「本文の脱漏箇所的一致」を指摘し、「転写における前後関係が、直接とはいえないまでも浮上してくる」と述べている（鹿島藩「弘法大師伝繪巻」十巻本について「ミュージアム」五一四号、一九九四年）。なお、鹿島氏は久保家旧蔵本、平間寺本については言及していない。
- 12 すべての座標軸が投影面に対して平行あるいは直交となるように置いた物体に、投影面に対して斜め方向から光線を当てる時に投影される状態を表したものの。直方体の場合、正面は長方形、他の二面は平行四辺形になる。建物の場合、わかりやすく言えば床面を形成する四辺のうち向かい合う一組の二辺が画面の上辺下辺と平行になり、他の一組は斜線となる描き方。
- 13 白鶴美術館本と延暦寺本の図様については下記の拙稿参照。「十巻本」「高野大師行状図画」の写本について「延暦寺本を中心に」『文化財学報』十二号、一九九四年。
- 14 注5・13掲載拙稿。拙稿「本證寺蔵「高野大師行状図画」考―十巻本系写本の補考をかねて―」『文化財学報』一三号、一九九五年。
- 15 長谷宝秀「弘法大師繪伝目録」「弘法大師行状繪詞伝」弘法大師一千百年御忌事務局、一九三四年。

（付記）

本稿は、平成十六年度奈良大学研究助成「十巻本『高野大師行状図画』の研究」による研究成果の一部である。本稿をなすにあたり、平間寺副執事藤田隆乘氏、同常務石上邦夫氏、白鶴美術館の山中理氏、延暦寺国宝殿の中野英勝氏、同三井田妙久氏、大蔵寺住職田辺史宝氏、奈良国立博物館の中島博氏のお世話になった。記して謝意を表す。

なお、本稿に掲載した写真のうち久保家旧蔵本については、東京国立文化財研究所の原板を使用した。そのほかは筆者が撮影したものである。

「高野大師行状図画」第六卷 詞書対校

【凡例】

- 一、白鶴美術館本を基準とし、延暦寺本、平間寺本、大藏寺本と校合した（順に「延」「平」「大」と略す）。
- 一、改行は白鶴美術館本の通りとした。句読点および会話文の鉤括弧は筆者による。
- 一、校合にあたっては、異なる箇所は傍線を引いて番号を付し、各段末に他本の字句を示した。「ナシ」は傍線部の字句がないことを示す。

高野大高師行状圖畫第六

恵日草創 靈山結界  
 釋尊出現 讚州銀山  
 善通寺額 土州朽橋  
 天地合字 大峯修行  
 小兒活生 了知牛語  
 西門日想 龍泉涌出

【第一段】

恵日寺草創

大師、ひろく夷狄の俗をすくはれむ

かために、はるかに東鄙の境おめぐり給

ふに、陸奥國合津郡に閑平殊勝の

靈地あり。三國陸奥出羽さかひおましへ

四隣あひのそむ。精舎おたつるに所を

得たり。土民お化するに便あり。大師こ、

に伽藍をたて、恵日となつく。金堂仏

像は皆金色丈六薬師如来日光月光十二

神將四面廻廊皆悉具足せり。又八角の堂

舎をたて、木像金剛界曼荼羅九會諸

尊を安置す。住侶三百餘人さかりに密

教を行す。徳壹菩薩といふ人あり。法相

宗の相師なり。もとより彼國にすみ給ける

か來て大師の門徒につらなる。大師、この

寺おもて彼菩薩に附屬して京洛に

歸給き。大師の御遺誠にて荒涼の修行

者おは入られすといへり。

1 延平大―廣 2 延―救 3 延平大―ナシ 4 延―為 5 延平大―遙  
 6 平大―さかひ 7 延平大―を 8 延平大―廻り 9 延―給に・平大  
 ―給ふ 10 延平大―ナシ 11 延平大―境 12 延平大―を 13 延―相望  
 14 延平大―を 15 延平大―を 16 延―立て 17 延平大―名 18 延―付  
 く 19 延―立て 20 延―余 21 延平大―高祖師 22 平大―也 23 延平  
 大―本 24 延平大―住 25 延平大―此 26 延平大―を 27 延―以 28  
 延平大―都 29 延―歸り 30 延―依 31 延平大―を 32 延―え

【第二段】

靈山寺結界

又奥州<sup>1</sup>のふの郡靈山寺といふ山寺あり。  
 本願<sup>2</sup>たれ人といふ事をしらす。魔界<sup>3</sup>さか  
 りにして住侶<sup>4</sup>まれなりけるを、大師結界し  
 給て悪魔をうしろの山にかりこめ給しか  
 は、界内<sup>5</sup>あへて侵凌の恐なく寺中<sup>6</sup>たちま  
 ちに繁昌<sup>7</sup>のいきほひをます。千手觀音  
 靈驗<sup>8</sup>の砌として邊民<sup>9</sup>なく巨益<sup>10</sup>お  
 く。女人<sup>11</sup>さらにいたらざるところなり。

1 延平大―信夫 2 延平大―誰 3 延平大―云 4 延平大―希 5 平  
 大―也 6 延―え 7 延平大―忽 8 延平大―お 9 延平大―を 10  
 延―受 11 延平大―更 12 平大―不至 13 延平大―處 14 平大―也

【第三段】

釋尊<sup>1</sup>出現

大師誕生の地讚岐國屏風のうらは、山の形  
 屏風をなせるかゆ<sup>2</sup>へに、すなはち名とせり。大師  
 かの山にしてをこなひ給けるに、孤峯の上、片  
 雲の中、尺迦<sup>3</sup>如來顯現し給き。大師歡喜のあま  
 り、そのありさまをかきとめて、いまにかの所に  
 をかせ給へり。其後、この山を我拜山とも  
 なつけ、涌出のたけともなづく。

1 延平大―迦如來 2 延平大―浦 3 延―故 4 延平大―則 5 延平  
 大―彼 6 延平大―釋 7 延平大―餘に 8 延平大―其 9 延平大―  
 とめ 10 延平大―今 11 延平大―彼 12 延平大―お 13 延―え 14 延  
 平大―此 15 延―名 16 延―名

【第四段】

劔御山

讚州劔御山八國寺は、三朶峯そはたちて半  
 天の雲<sup>1</sup>こしをめぐり、四望山晴て八國の境眼に  
 あり。むかし大師この峯に修行し給ける  
 に、五柄の利劔そらよりあまくたり、故に劔  
 の御山といふ。金剛藏王顯現して大師と談話

し給ふ。彼五剝をもて巖穴にうつまれたり。則中央峯お點して藏王の權扉おひらく。大師みつから千手觀音の靈像お作て、本佛として精舎をたてらる。蓮宇もとみをつらね、松房のきおならへたりき。かの寺の縁起にのせたり。

1 延平大―腰 2 延平大―廻 3 延平大―昔 4 延平大―此 5 延平大―る 6 延―すなはち 7 延平大―中央の 8 平大―みね 9 延平大―を 10 延平大―を 11 延平大―開 12 延平大―を 13 延平大―ひ 14 延平大―軒 15 延平大―を 16 延平大―たり 17 延平大―彼

## 【第五段】

普通寺額

御生所讚岐國屏風浦に普通寺曼荼羅

寺とて大師經始の伽藍あり。題額は大師すな

はちかき給へり。昔、陰陽師晴明ことの縁あり

て彼國に下向の時、よる道おゆくに、相具したる

使鬼神火おともしたりけるか、普通寺の

前おすくる時には火をうちけちてみえず。寺

をすきてのち出來れり。晴明勸發しけ

れは、この寺の額は四天王守護し給ふか

ゆへに、おそれをなして道をかへたるなりとそ申ける。

1 延―屏風の浦 2 平大―則 3 延平大―書 4 延―え 5 延―むかし 6 延平大―事 7 延―有 8 延平大―り 9 延平大―を 10 延平大―行 11 延平大―を 12 延平大―を 13 延平大―過 14 延平大―ナシ 15 平大―見 16 平大―過 17 延平大―後 18 平大―此 19 延平大―ナシ 20 延平大―ナシ 21 延平大―故 22 延平大―恐 23 延―みち 24 延―え

## 【第六段】

生朽木

土佐國に一のかけ橋あり。朽木かまゑあや

うくして、行人つねにたちもとほる。大師

かの木に向て三歸をさつけ、誓願していはく、汝

朽損すへからすと。其後、件の梯なかく

牢固にして行客安全なることをえたり。

彼辯巴か盃酒を喫てとをく火災のう

れへをすくひ、趙炳か枯木を咒して

ふた、ひ枝葉の榮をひらきし神仙

の術おのつから相同しきものか。

1 延平大―梯 2 平大―へ 3 延―危 4 延平大―常 5 延―を 6  
 平大―彼 7 延平大―授 8 延―云 9 延平大―得 10 延平大―かの  
 11 延平大―遠 12 延平大―憂 13 平大―救 14 延―ナシ 15 延平大―  
 ナシ 16 延平大―物

【第七段】

天地合三字

播磨國行路のほとりにいやしきいほりありけるに、大師やとをかり給ふ。老嫗出來して飯お鐵鉢にもりて大師に供養して申けるは、このはちは尺尊の御はちなり。婆羅門僧正天竺より傳來して行基菩薩にさつく。妾は行基菩薩の弟子の僧、いまた出家せさりし時の妻なり。かの僧、この鉢を相承して妾にさつけていはく、後代に聖人ありて、なんちか家にやとるへし。なんちこの鉢おもて、ふた、ひ尺尊を供養すへしと。今、幸に聖人にあへり。こゝをもて其志をあらはすなり、と申けり。大師その言お感して鉢おうけ給てのち、かれかために天地合の三字お柱にかきつけ給ふ。その字ふかく染てけつれともうせず。柱おあらひて

のむものはもろくの病いえすといふことなし。

1 延平大―邊 2 延平大―宿 3 延―老たる 4 延平大―を 5 延平大―を 6 延平大―此鉢 7 延平大―釋 8 延平大―鉢 9 平大―也 10 延平大―授 11 平大―也 12 延―彼 13 延平大―此 14 延平大―授 15 延―有 16 延平大―汝 17 延平大―汝此 18 延平大―を 19 平大―二度 20 延平大―釋 21 延―え 22 延―その心さし 23 平大―顯 24 延―也 25 延平大―其 26 延平大―を 27 延平大―を 28 延平大―後 29 平大―彼 30 延―為 31 延平大―を 32 延平大―書付 33 延平大―其後 34 延平大―削 35 延平大―ナシ 36 延平大―洗 37 延平大―物 38 延―ナシ 39 延平大―事

【第八段】

大峯修行事

大師、南山大峯御修行有ける時、菩提心論尺摩訶術論等の聖教を自か、せ給て、靈巖の中に埋せ給けり。彼峯の祕所にて至于今まで故實の先達は傳て、是を拜事にてこそ持なれ。役行者とことに御契深して、今代までも高野へかよひまいらせ給也。其時は異香山にみち、音光時々照と申傳たり

1 平大—あり 2 延平大—ナシ 3 延平大—書 4 延平大—給ふ 5  
 延—今に至・平大—今にいたる 6 平大—こと 7 延—侍れ・平大—  
 侍けれ 8 延平—促 9 延平大—殊 10 延平大—ふかく 11 延—今の  
 世・平大—今世 12 延平大—なり 13 延平大—てらす 14 延—つたえ

【第九段】

小兒活生

和泉國大鳥の郡にやもめなる女ひとり  
 の男子をもちたりけるを狼にくら

はれて死門に入ぬ。その母、地にふし天に

仰て哭泣哀慟す。大師あはれみて蘇生咒（以下欠）

1 延平大—其 2 平大—臥 3 延—あふき 4 延平大—哀 5 延平大—  
 一を桶し給に忽然としてよみかへりて身軀安全なり（平大は末尾の  
 「なり」を「也」とする）

【第十段】

知牛語

攝州住吉浦にて一の犢、大師を見た

てまつりほゑけるに、大師こうしに向

て、汝か心にまかすへし、と仰られける

を御弟子あやしみて問たてまつるに、ふる

きをひ物わきまふへしやいなや、と鳴  
 そ、との給けり

1 延—奉・平大—奉り 2 延平大—吠 3 平大—ころ 4 延—奉る・  
 平大—奉 5 延平大—負 6 平大—弁 7 延平大—なく

【第十一段】

日想觀

四天王寺の西門にして大師日想觀を修

し給ひしに、蒼海雲につらなり、赤日

波に映して、迷悟一如の觀たちまち

にほからかに、自覺本初の源すみや

かにひらけて、五智の寶冠頭に

顯現し、三密頓證眼前に掲焉なり。

1 延平大—ナシ 2 大—ナシ 3 延平大—忽

【第十二段】

龍泉涌水

河内國龍泉寺本願大臣、伽藍おたてむと

し給ふに、この地の勝形あひかなへりと

いへとも、往古の池あり、惡龍なかにすむ。人民

つねに害お<sup>6</sup>うけ、村閭みなかならひをふく

あり。爰大臣冠帯お<sup>9</sup>着し鋏笏お<sup>10</sup>た、しう<sup>11</sup>

して、目しはらくもましろかす、池の底をみる

こと七日七夜、その時、龍王人の形を現して

曰く、大臣猛利の誓願はなはたうこきかたし。

我<sup>16</sup>いかてか仏法の威験にかつへきやと、則

本形に復して響お<sup>17</sup>、こしとひ去ぬ。其<sup>18</sup>

より池水かれつきて土石うるひなし。水お<sup>19</sup>

隔<sup>27</sup>つる事十餘里、寺院お建立すといへとも

僧徒住持にたへす。大師加持し給時、本龍

法味を感じて忽に慈心をお<sup>20</sup>こし、舊池に

歸來て清泉をわかし出<sup>21</sup>す。其流たえすし

て、いまに潺湲たり。仍、龍泉寺と号すと

いへり。

まち 29延—發 30延平大—いた 31延平大—ナシ

- 1延—太 2延平大—を 3延平大—此 4延平大—相叶 5延平大—常 6延平大—を 7延平大—悲を含めり 8延平大—太 9延平大—を 10延平大—を 11延—く 12延—暫 13延平大—見 14延平大—事 15大—貌形 16延平大—いは 17延平大—太 18延—甚動 し・平大—甚動 19延平大—争 20延平大—勝 21延平大—をお 22延平大—飛 23延平—それ・大—その 24延平大—涸渴 25延—うる おひ・平大—うるをひ 26延平大—を 27延平大—へだ 28延—たち

## 第一段「恵日草創」



図1-1 白鶴美術館本「恵日寺草創」

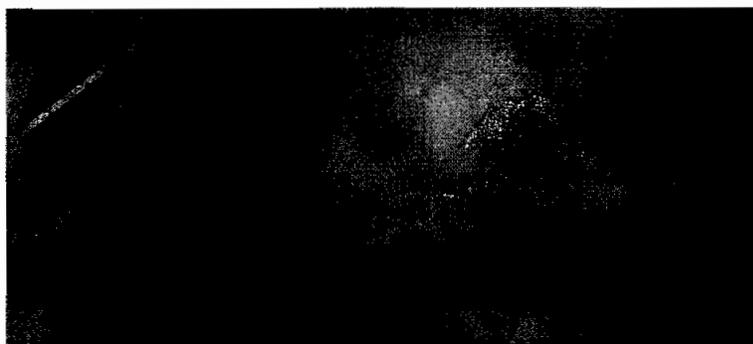


図1-2 延暦寺本「恵日寺草創」



図1-3 平間寺本「恵日寺草創」



図1-4 大蔵寺本「恵日寺草創」

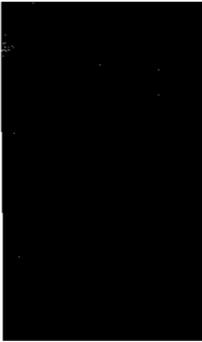
・ 図1-1、1-2、図12-1、4は、白鶴美術館本・延暦寺本・平間寺本・大蔵寺本の「高野大師行状図画」から第六卷の図を抄出したものである。ただし、紙面の都合により左右端を若干切り落とした場合がある。

・ 最上段には白鶴美術館本の目次による事蹟名称を掲げ、各図のキャプションには各本の各段標題を示した。

第三段「釋尊出現」



「釋尊出現」



「釋迦如來出現」



「釋迦如來出現」



「釋迦如來出現」

第二段「靈山結界」



圖 2 - 1 白鶴美術館本「靈山寺結界」

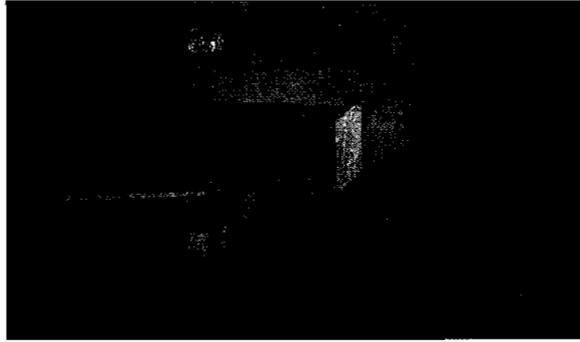


圖 2 - 2 延曆寺本「靈山寺結界」

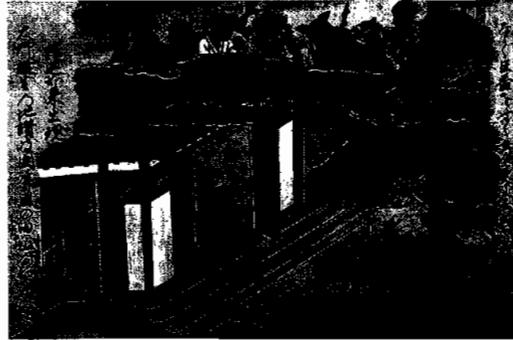


圖 2 - 3 平間寺本「靈山寺結界」



圖 2 - 4 大藏寺本「靈山寺結界」

第四段「讃州釧山」



図4-1 白鶴美術館本「釧御山」



図3-1 白鶴美術館本



図4-2 延暦寺本「釧御山」



図3-2 延暦寺本



図4-3 平間寺本「釧御山」



図3-3 平間寺本



図4-4 大蔵寺本「釧御山」



図3-4 大蔵寺本

第五段「善通寺額」



図5-1 白鶴美術館本「善通寺額」

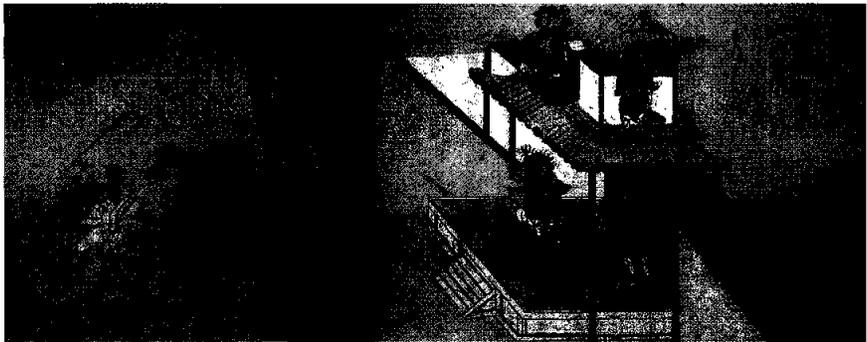


図5-2 延暦寺本「善通寺額」



図5-3 平間寺本「善通寺額」



図5-4 大藏寺本「善通寺額」

第七段「天地合字」

第六段「土州朽橋」



图7-1 白鶴美術館本「天地合三字」



图6-1 白鶴美術館本「生朽木」

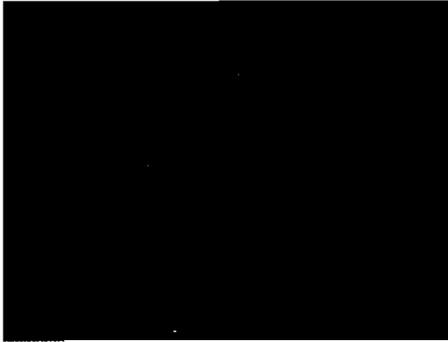


图7-2 延暦寺本「天地合三字」



图6-2 延暦寺本「生朽木」

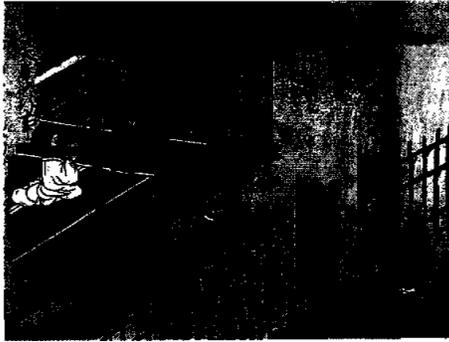


图7-3 平間寺本「天地合三字」



图6-3 平間寺本「生朽木」



图7-4 大藏寺本「天地合三字」



图6-4 大藏寺本「生朽木」

第九段「小兒活生」

第八段「大峰修行」

(白鶴美術館本 欠)



图 8 - 1 白鶴美術館本「大峰修行事」



图 9 - 2 延曆寺本「小兒活生」

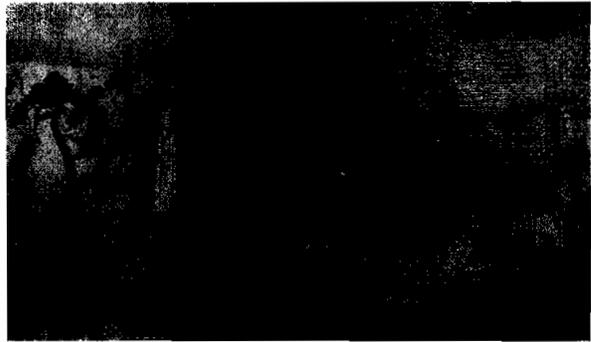


图 8 - 2 延曆寺本「大峰修行事」



图 9 - 3 平間寺本「小兒活生」



图 8 - 3 平間寺本「大峰修行事」



图 9 - 4 大藏寺本「小兒活生」



图 8 - 4 大藏寺本「大峰修行事」

第十一段「西門日想」

第十段「了知牛語」



図11-1 白鶴美術館本「日想観」



図10-1 白鶴美術館本「知牛語」



図11-2 延暦寺本「日想観」



図10-2 延暦寺本「知牛語」



図11-3 平間寺本「日想観」



図10-3 平間寺本「知牛語」



図11-4 大蔵寺本「日想観」



図10-4 大蔵寺本「知牛語」

第十二段「龍泉涌出」



図12-1 白鶴本「龍泉涌水」



図12-2 延暦寺本「龍泉涌水」



図12-3 平間寺本「龍泉涌水」



図12-4 大蔵寺本「龍泉涌水」

**On the kōya Daishi Gyōjō-e**

—Heiken-ji version—

Kimiko Shiode